

劍豪 秋山要助

渡辺洵一郎

旧埼玉郡箱田村の出身で、安永元年（1772）に生まれ、通称要助、諱を正武と称し、紺屋の息子であったのでこれを業とした。

幼少の頃から剣術を好み、十六・七歳の時秩父甲源一刀流の逸見太四郎の道場を訪れ弟子入りを願ったが「紺屋の倅に剣術は必要ない」と断られて発奮、江戸に出て神道無念流の達人戸ヶ崎熊太郎道場の高弟岡田十松に師事して十九歳で「突く、引く、突く」の奥義を極め免許皆伝を受けて郷里に帰った。

その年忍藩剣道師範三田三五郎を御前試合で打ち負かしたことから、所払いとなって出奔。全国各地を歴遊した。

寛政十二年ぬ十九歳の時、大川平次郎・高橋平吉を連れて奥州へ旅し、水戸の帯金弥四郎（岡田十松門人）宅に滞留して立原杏所に墨絵を学び、梅の絵は専門大家を凌ぐほどの妙筆であった。

郷里箱田に帰り、ここに道場を持ったのは四十歳前後の頃と言われる。秋山流剣術元祖とし、箱田村をはじめ武州・野州佐野・上州などに道場を開き、約二千人の門人を指導した。晩年は、前に訪れたことのある勤王家山崎尚志道人の招きにより佐野に赴き、尚志堂塾で剣術を教え、ここを第二の故郷と定めた。

文政七年感ずるところあって上毛木崎竜徳寺雲岫和尚に参禅剃髪して秋山入道雲嶺と号し九七歳の高僧愚禅和尚より剣禅一如の妙を体得した。

天保四年八月二五日病を得て構武堂に没す。享年六二歳。佐野の興福寺に葬られ、辞世の「世の中はただ春の夜の夢なれや富も誉もいかにとやせん」が墓に彫られている。

要助は子がなく市内箱田の秋山屋敷跡に標示が建っている。



（熊谷市公協だより 第23号 平成7年より）